

## 連載

【試論】民族総福音化への道 (3)  
先ず早天祈祷から③副総裁兼事務局長 手束 正昭  
(高砂教会牧師)

何故に早天祈祷には大きな力があるのか。先ず、神学的・聖書的理由を探ってみよう。詩篇五・三には早天祈祷について次のように記されている。「主よ、朝ごとにあなたにはわたしの声を聞かれます。わたしは朝ごとにあなたのために、いけにえを備えて待ち望みます」(口語訳)。

ところが、ヘブル語原文には「いけにえ」という言葉はない。そこで、新改訳は「主よ、朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします」と訳し、共同訳は「主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いて下さい。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て、あなたを仰ぎ望みます」と訳している。しかし、事柄としては口語訳のように「いけにえ」を入れて訳す方が、早天祈祷の本質をついている。

この「いけにえ」ということについては、二通りの解釈がある。一つは、当時のイスラエルの人々は早天祈祷の中でも、いけにえを携え行き、先ずそれを供えてから祈ったことに由来するというものである。そしてもう一つは、早朝に神と交わり祈るために時間を割くことは、それこそ大なる犠牲であり、このこと自体がいけにえに相当するという解釈である。いずれにせよ、早天祈祷には犠牲を捧げるという意味合いがあり、それ故に早天の祈祷はよく聞き届けられることになるのである。何故ならば、主なる神は心のこもった犠牲を喜ばれ、顧みられる方だからである。

もう一つの早天祈祷の有効性を表わしている御言葉は箴言三・九―一〇である。「あなたの財産と、全ての産物の初なりをもつて主をあがめよ。そ

うすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる」。

早天祈祷には、「初なり」「初穂」を捧げるという意味合いがあるのである。一日の最初の時間を主に捧げるからである。天の父なる神は、「初めの食い」であり、「初なり」「初穂」を喜ばれるお方である。そこで、聖書の随所に、「初なり」「初穂」の捧げものが勧められている。何故「初なり」「初穂」が大切かというと、それが全体を代表するからである。ロマ書は語る。「もし、麦粉の初穂がきよければ、そのかたまりもきよい。もし、根がきよければ、その枝もきよい」(一一・一六)。それ故に、一日の初めの時を神に捧げ、神と交わり、神と共に過ごすことは、その日全体が恵みのうちに包まれ、神の臨在の中で過ごせるということである。アンドリュー・マレーは言う。「朝の祈りは、それ自体が目的と見なされてはいけません。それは目的を達成するための手段の役をすべきです。そしてその目的とは、一日中、キリストの臨在を獲得することなのです」。

このことは、早天祈祷をしたことのある者ならば誰でも体験することである。早天でみっちり祈ってから過ごす一日と、何かの都合で祈らないまま過ごす一日とは、一日の霊的充実感に大きな隔たりがあることを感じるものなのである。早天祈祷をみっちりした一日は、その日全体が勝利のうちに運ばれ、恵みに満ちた一日となるのである。

最後に、早天祈祷の効力の凄さについて、私の証をしてみたい。  
一九八〇年は私の教会生活にとっ

ても人生にとっても最大の試練の年であった。カリスマ刷新の是非を巡って教会が真二つに分裂し、反対派の人達の執拗な私への排斥攻撃が続けられただけでなく、経済的にも追い詰められ、絶体絶命の淵に追いやられていった。その苦悩の中で、私は早朝四時頃に目が覚めてしまうのであった。これは、聖霊が「寝床から出て祈れ」ということだと悟った私は、毎日早朝に目が覚めると、直ちに起き上がって、書斎に行つて祈り始めた。静かな祈りではない。搾り出すような叫ぶ祈りであった。隣室で寝ていた家族からは「目が覚めてしまふ」という抗議の声が上がったが、私は耳を貸さなかつた。そんなことに取りあつていゝ余裕はなかつたというのが正直なところである。

二週間が過ぎた頃であつたらうか。ひとしきり祈つて、ふと目を上げてしらみかけている窓の外を見た時、細く静かな声が語りかけてきた。「あなたは勝利する」。私はその主の語りかけを聞いて歓喜した。やがて三ヶ月が経過した頃、紛争は決着し、教会内は静まり、次々と多額な捧げものがなされてき、窮境は見事乗り越えられていったのである。それは正に、詩篇四六篇の御言葉の如くであった。

「このゆえに、たとい地は変わり、山は海の真中に移るとも、われらは恐れがない。たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによつて山は震え動くとも、われらは恐れはない。一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。神がその中におられるので、都はゆるがない。神は朝はやく、これを助けられる」(二一―五節)